

## ジャーナリストの卵達の訪日

交流協会では、日本と台湾との青年交流促進を重視し、様々な分野の学生を日本へ招聘しております。本年1月28日から2月5日、ジャーナリズム専攻の学生を招聘致しました。これは日本の報道関係機関訪問により報道規範、職業倫理の在り方を勉強することで正しく報道することの重要性を認識し、更に、日本文化も体験することにより、日本理解を深めることを目的としたものです。

ここに、招聘した20名のうち4名の訪日報告書をご紹介します。

### 銀白世界の多彩な体験

政治大学メディア学科  
伍昭萃

日本での9日間の行程は、一生で一番忘れがたい旅行になるに違いない。日本の新聞の現況に対する理解を大きく深めたほか、日本の文化、人の情についても深い体験と感触を得た。

各新聞社、テレビ局を参観訪問する行程で、最も印象が深かったのが、NHKの訪問だった。同じ公共放送局でも、明らかに台湾の公共テレビとまったく異なる規模と営業方式を持っている。NHKが災害ニュースに対する緊急対応策と重視について知った。私は、2009年にピューリッツァー賞の解説報道部門で受賞したジュリー・カート (Julie Cart) が、「環境は将来唯一のニュースに新聞になるでしょう」と言っていたのを思い出した。NHKでは、この言葉が検証されている。人々の周辺環境に対する重視が日増しに高まり、また、最近自然災害が増加していることにより、人々は環境問題を重視せざるを得なくなっている。すべての政策は環境を根拠としなければならない。ニュースも当然、こうした趨勢に従って、次第に変化していかねばならない。

趨勢に従うだけでなく、NHKは公共放送局として、正確な情報を適時に伝え、大衆を教育する

という重責を担わねばならない。この点において、NHKがしていることは、台湾の公共テレビと比べると、かなり優れている。その理由は、まず根本的な料金徴収方式を比較すべきである。NHKには大量の固定の受信料を支払う視聴者を抱えている。高額な受信料により、NHKには優れた番組を制作する条件が整っている。さらには違った視聴者層をターゲットにしたチャンネルもあり、視聴率を気にせず、よい番組を制作することに心を配ることができる。また、日本人の極めて高い信頼を得ているため、NHKは日本人の心の中でかけがえのない地位を占めている。こうした例は参考とし、学ぶべきである。

反対に台湾の公共テレビは、大衆に高品質の番組を提供しようと努力しているが、予算が限られているため、発揮できる余地は本当に大きくなく、視聴率も常に高くない。存在意義さえ試練を受けている。それ自体がニッチで、構造の違いも大きいため、日本の成功経験を台湾にそっくりコピーすることはできない。そうであっても、やはり私達が学ぶべきところはある。

NHKでもう一つ、私が驚いた目玉が、NHKの博物館である。各ブースに多くの精緻な展示品があり、またハイテクのデジタルインタラクティブゾーンが多く設置され、NHKの異なる視聴者層に合わせて、それぞれのテーマのブースを用意している。内部の管理にまた感心し、また、NHK

が常に展示場を更新していることが分かる。その時の最新の番組、ドラマに基づいて、多くの精緻な展示品が飾られており、どんなに見ても飽きない。一テレビ局の博物館に過ぎないけれど、その豊富さは、多くの台湾の国家級の博物館と比べても、いささかも遜色しない。もし台湾のテレビ局や新聞社も自社専用の博物館を持ち、過去の出版物、ドラマの道具などを展示することができれば、きっと価値があるだろう。

厳粛なメディア参観訪問のほか、長野県の行程は、心身の収穫が最も大きかった4日間だったと言える。本物の日本の温泉及び和服、茶道を体験したほか、美しい古跡を参観し、荘厳かつ神聖な善光寺を参拝した旅には、心が洗われた。手を伸ばすと5本の指が見えない、極度に寒い地下道を過ぎ、不安な気持ちを抱きつつ、一歩ずつゆっくりと前進する。伝説の幸福の鍵に触れるまで。その瞬間、ある重要な道理を悟り、重い負担から解放されたようにほっとする。あたかも、すべての困難をすらすらと解決できるかのようだ。本来、道の途中の暗闇と未知の不安は、私達に目の不自由な人のつらさを教えるためのものだ。私達が生まれながらにして、この世界にある草や木を見られるのは、けっして当然のことではないと、知らせるためのものだ。なぜならこんなに幸運ではない人が多くあり、すべての当然のことはすべて一種の幸福なのだ。このように考えると、本来私達は常に多くの幸福に囲まれていることになる。冬に日の寒さの中で、にわかにながら温かさをいっばいになった。

しかし私に温かさを感じさせたのは、これだけではない。さらに長野県の人情味があった。ここで、初めて海外でのホームステイを体験した。私達をもてなしてくれた荒井さんご夫妻は、お父さんは比較的寡黙だったが、非常に流暢に日本語で話ができなくても、一生懸命私達と交流をして下さった。私達が将来記者になる志があることを

知っていたので、真剣に私達とニュースについて話して下さいました。ときどきこぼれるはにかんだ微笑みは、私達を心底から楽しませた。お母さんは、私達を本当の娘のように世話を下さった。親切に私達に各地を旅行した写真を見せて下さった。それからかわいい孫娘達の写真も見せて下さった。私達が聞きとれず、分からない日本語は、終始とても辛抱強く私達のために説明して下さいました。さらには自分が大学の中から大事にしている特別な和服と娘さんの和服も取り出して、私達に着せて下さった。ほんとうに貴重な経験だった。お母さんが作った料理は、胃から心の底まで暖めてくれた。私は一生忘れないと思う。長野県芋井という小さな村で、初めて会ったおじいさんとおばあさんと、温かいこたつに座り、一緒に食事をし、おしゃべりし、テレビを見て大笑いした夜の事を。外は白い雪が厚く積もっていても、心の中はこんなにも温かかったことを。

過ごした時間はとても短く、別れの時も慌ただしかったが、台湾に戻ってから、日本の様々なことを思い出してみても、最も気にかかるのがおじいさんとおばあさんのことだと気付いた。ときどき長野県の天気を調べてみて、雪はいつ解けるのだろうか考える。こんなに寒い天気でおじいさんとおばあさんは元気だろうか？荒井家の前のあの神代桜は咲いたのだろうか？おばあさんが植えたりんごの樹がたくさん実をつける様子。今後会う機会がないかもしれないと思うと、鼻がつんとしてくる。しかしこっそりと決心するのだ。いつかきっとあの山の上の美しい村に行って、ほかの季節の美しい景色を見てみよう。次は台湾料理をおじいさんとおばあさんに作ってあげよう。一緒に庭で美しい桜の花を眺めよう。一生懸命に日本語を勉強したら、おじいさんとおばあさんと思ひ切りおしゃべりしよう。彼らに台湾についての面白い話を全部してあげよう。私はきっと変わらずこの特別な縁を大切にしよう。2人に会いに行

く機会が訪れるまで、おじいさんとおばあさんには私達のことを忘れないでほしい。

スケジュールがいっぱいの9日間は、私にいったいどの収穫をもたらした。多くの初体験により、ニュースメディアに対する学習だけでなく、私はこれまでと違う角度から日本という国を仔細に味わうことができた。仕事は非常に効率的ですきがないが、人に歩みを止めることを教える、ゆっくりと重々しい文化もある。おしゃれでモダンな東京があれば、人情味あふれる、温かい長野もある。多くの部分で極度に細部を重視しつつ、さっぱりと誠実で率直な面もある。日本はこのように衝突に満ちつつ、調和の取れた珍しい国だ。目をそらすことができない。とても引き付けられる。

本当に今回の得難い機会に感謝する。私に自身の将来の職業に対して多くの示唆を与えてくれただけでなく、日本という台湾と密接な関係のある国のことをさらに詳しく理解できた。

## 「体も魂も満腹」の日本参観訪問体験

国立政治大学メディア所  
盧安邦

これまでこんなにもびっしりで、盛りだくさんの素晴らしい旅程に参加したことはなかった。日本交流協会が組んだ行程から、日本文化とメディアのあり方についての知的なもてなしを受けた。このような行程は本来、一人の体と魂を満たすのに充分だったが、私達のように貪欲な若者は、一つひとつの日程欄に更に様々な探検を詰め込もうとする。私達は高速道路のサービスエリアで、群がって一つひとつの驚きと喜びを捉え、創り出しもした。満腹になった夜に、目を見開いて、街をぶらついた。疲れきった深夜にも、眠りたくなかった。「天よ、あと5日になりました。私は帰りたくありません！」みんな心の中でカウント

ダウンしながら過ごした。

メディア参観訪問は、9日間の行程で、私達はまず日本テレビ、NHK、日本新聞協会、日本新聞博物館、SBC 信越放送、信濃毎日新聞美日新聞社などのメディア機関を参観訪問し、そして東京大学大学院の情報学環と交流を行った。その過程で、日本のメディアあり方と台湾との違いを強く感じた。以下に2つに分けて述べる。

### 一. 収入源及びニュースの価値的差異

台湾のメディア機関は広告に極度に依存している。このため、広告主がメディアの最も主たる責任の対象となっている。このような状況で、購読者・視聴者が演じる役割は、視聴率へと簡素化されている。これはどのような影響を招くだろうか？これはどのような手段を用いようとも、視聴を引き付けられさえすれば、よい手段であることを示す。このような客観的法則の下、「娯楽」形式で出現した「センセーショナル」な内容が、人類の脆弱な心を攻め落とし占領することに成功し、視聴率を引き付ける必勝手段となった。ニュースの仕事には、プロの規則がある。台湾のメディア所有者は、ニュースを娯楽番組の方式で扱おうと、もっと関心を集め、より高い視聴率が得られること、或いは視聴している多くの人々が、批評的、嘲笑的な形で、私達のニュース番組を見ることに気付いた。しかし視聴率の客観的法則では、それは重要ではない。人を笑わせる内容で人々の視聴を引き付けることができるとさえ言える。そして私達は様々なナンセンスで、笑わせる、ばかげたニュース番組をもっと制作すべきだということになる。

日本のニュースメディアにとって、組織の信用は最も重要な鍵だ。日本のメディアの収入源は台湾と違い、NHKについては、彼らは視聴者の受信料に依存し、民放放送は企業の広告収入により成り立っている。新聞の運営は固定の購読者の持続的な支持にかなり依存している。このため、日

本のメディアはまず視聴者・購読者に対して責任を負わねばならない。その次にこの論理の下で、広告収益のことを考える。日本はニュースメディアの境界を守ることに成功している。ニュースの領域で、持続しているのは依然として、組織の信用との戦いである。娯楽番組は極度に笑いを取り、下品で、ナンセンスでいい。ポルノ雑誌と漫画は、コンビニで売ることさえ認められている。しかしこうした客観的法則は、ニュースの領域には浸透しない。思うに、これは日本の長い歴史文化の蓄積のほか、その収益構造と密接な関係がある。近年、台湾の大衆は、記者とニュースに不信感を抱いており、人々は娯楽のつもりでニュースを見はじめている。公共生活が娯楽化すると、若者は厳粛なことに無関心になっていく。ニュースメディアが果たすべき責任を果たし、台湾の人々の新聞と記者に対する信頼を取り戻してくれることを願う。日本のでの参観訪問は確かに価値のあるものだった。

## 二. 毎年の大河ドラマに郷土を愛する気持ちを見る

私は歴史は年代と人物の系譜にのみであるべきではなく、物語の筋と経緯、時代的価値の基礎等、異なる視野から切り込んだ解釈があるべきだと考えている。私は、台湾にはこうした歴史への愛情が欠如していると心底思う。この度、日本の都市景観及びメディアの言葉から、見習うべき模範事例を見つけた。

NHK が表現する濃密な歴史感はいままでずっと私を感動させてきた。毎年の大河ドラマは何度も日本国民に重要な歴史物語を復習させる。素晴らしいのは、大河ドラマの放送が、いつも都市に対して自身の役割を再定義することである。日本（とりわけ関西地区）を目を凝らして探訪すると、人々は必ず道端によく出現する木の牌、石碑や彫像を発見するだろう。それらはかつてこの地で起



こった事件について語り、その時代の恩や仇やいざこざを振り返り想像させてくれる。その歴史と関係のある本や映画に触れたことがあれば、そこに存在しているような錯覚を味わうことができる。そうして、その都市の物語を知って感じて、冷ややかな都市が瞬く間に生き活きとしはじめ、都市の血液、及びその血液がもたらすぬくもりを感じることもできるのだ。

NHK 今年のゴールデンタイムの大河ドラマ『八重の桜』は、最も活力に富み、ヒューマンズに満ちた模範事例かもしれない。聞くところでは、2013年の大河ドラマの企画は本来これではなかったらしいが、2011年3月11日に東日本大震災が発生し、東北地域の発展が大打撃を受けたため、NHKは東北復興支援計画を支援するために、年度の大河ドラマを福島県会津出身で、同志社大学を創設した新島襄の妻八重の一生に変更した。これにより、改めて人々の東北地域に対する関心を引き付け、東北の観光に活気を取り戻そうと願ったのだ。

『八重の桜』の例を通じて、私達はNHKの日本の土地、住民に対する愛情を見ることができる。しかしその一方で、NHKと国の間に存在する密接な協力関係にも気付かされる。実際のところ、たった数日の観察で、日本人の「共通認識」の強調は台湾を大きく超えていると思った。この共通認識は常に国家、宗教、科学的権威のような権力機構によって駆り立てられるのだ。こうした傾向

は日本のメディア機関にいくつもの影響を与えている一種のメディアの役割に対する実用主義は、日本のメディア操作の客観的法則にも、非常に明確に存在している。各危機が出現する時、メディアの役割は素早く共通認識を固め、人心を落ち着かせることである。日本の災害ニュースの処理は、各種メディア組織を統合し、目前の問題を共に解決する最適な模範事例である。しかしその一方で、各方面の意見を統合する審議式民主主義は、危機の処理において効率が悪くなる。最も効率のよい方法は、権力機構の裏書を通じて、有力な論述を創造することであり、人々がそれを信じることで、共通認識が自然と出現する。国家、宗教、科学などの権力機構は日本全体の文化において、共通認識に対する協調の中で養分を得て、次第に育っていく。オルタナティブ、異議メディアの生存する空間を排斥するように。

メディア参観訪問及びそれぞれの空腹を満たす美味しい物、よい酒、馬鹿騒ぎと笑いのほか、長野県芋井の「田舎に泊まろう」は、なんとと言っても今回の旅程で最も強く印象に残った経験の一つである。

3人の年の大きな男子学生が長野県芋井村の西澤ご夫妻宅で、一晚を過ごした。一晚じゅう漢字、日本のドラマと電子辞書で彼らとコミュニケーションを図った。テーブルいっぱいの料理の前で、私達は充分でない言語ツールで、彼らの表情、



身振り手振り、語気、感情に注意を知るのに多くの気持ちを傾けるほかなかった。一時一時の西澤ご夫妻の放つ善意を捉えようとした。「これは最高の日本酒だよ!」「私はこれまでたくさんの国に行きました。台湾にも何度も行きました。こいつもね。前回台湾へ行ったのは何年前だったかな。おまえは覚えているか?」そこで、私達は西澤ご夫妻の思い出につきあった。見ているのは西澤ご夫妻のパスポートと写真だったが、私達が一緒に探したのは長野県芋井村に暮らす75歳の西澤ご夫妻と台湾から来た3人の30前の青年の共通点だった。感動的なのは写真そのものではなく、ある種言葉にならなくても、自分の熱意とぬくもりを感じてほしい。長野の山上の白い小村で、私達のおなかと心の中はいっぱいになり、暖かく、満たされた。

今回の旅程にタイトルを付けるとしたら、身も心も満腹と言うほかない。なぜなら毎日の一つひとつの経験がどれもこのように鮮明で貴重だったからだ。人と人の合流点でぶつかり生じたすばらしさは、個人旅行では得られない。今もこの上なく懐かしい。私は慌ただしいホテルの朝食が懐かしい。短い交流の時のおしゃべりが懐かしい、人の群れの中の喧騒と一人で静かに観察したことが懐かしい。一時一時が続いている。過ぎ去った昨日に対する懐かしさと未知の明日への期待。ああ、本当に1月28日の正午に戻りたい。会ったことのなかった人々と、それぞれが不安と猜疑心と期待を抱いて、空港で不慣れな感じて挨拶をし、それから各自の荷物をベルトコンベヤに乗せた。

「先輩!スーツケースがとっても小さいですね!」と君たちが言った。

「はは、自分では大きすぎると思ったんだけど。」私は頭をかきながら答えた。

放送が聴こえ、私達は笑って搭乗した。そしてこの素晴らしい9日間が、私達の方へまっすぐやって来るのを待った。

## 日本友好訪問

国立交通大学  
メディア・テクノロジー学科  
頼映秀

日本と台湾の国土、歴史、文化には、多くの分  
から難い関係がある。幸運にも、今年、日本交流  
協会主催の「ニュースメディア関係学科訪日団」  
に参加する機会を得て、日本の権威的メディア及  
び地方メディアとの交流を通じて、異なるニュー  
ス制作方法を比較、理解し、かつ日本のニュー  
ス業に共感を覚えた。行程で企画され文化交流で  
は、行程表を遥かに上回る豊富な経験ができ、交  
流協会の計らいに感謝している。また、一人ひと  
りの日本の国民の親切に感謝している。

### 首都東京のメディアと交流

日本テレビは日本で最も古い民間放送局で、  
違った方向のニュース番組を届けることを狙いと  
している。日本国内のテレビ受信料支払方式は台  
湾とは違い、類似台湾のMODのオンデマンドに  
似ている。日本テレビの視聴率は40%以上で、彼  
らの5000万世帯の視聴者のうち、100万世帯に認  
められ、視聴者の信頼と賛同を得ていることになる。

私達との討論に来た3人の部長のうち、海外報  
道部の谷野部長は、ニューヨークとパリの仕事の  
経験を比較し、日本テレビは保守中立の傾向にあ  
ると述べた。民間放送局として、政府の情報と内  
容をチェックする必要がある。影響力のある報道  
は、視聴者の世論の材料となるため、彼らはい  
い加減にできない責任だと思っているからだ。台湾  
のニュース界の財閥の関与や旺中の買収案とい  
ったテーマについて討論し、日本テレビの部長達  
は、先に財閥が関与すると決めたのは、投資のため  
か、それとも支配のためかと思ったようだ。メ  
ディアは取引可能な産業ではない。これは日本の国民の

心の中に共通認識としてあることだ。だから、日  
本の『放送法』は、一つの団体は一つの放送局し  
か支配できないと定めている。そしてこれがまさ  
に台湾政府が旺中案において非難される場所なの  
だ。国民はメディアの公共性を認めている。政府  
には、財閥がメディアを牽制する行為を拘束で  
きる法律が何もない。

NNKは、日本で最も権威ある公共放送局であ  
る。3.11日本大地震及び津波災害の時に、NHK  
は571時間連続で地震関連報道を行った。彼ら  
は、これがマスメディアの使命であると考えてい  
る。彼らは余震予報及び地震による人、財物の損  
傷の報道を行うほか、各収容所の情報、病院、入  
院患者リスト、伝染疾病予防の宣伝指導について、  
すべて彼らの報道範囲であり、このような情報取  
集プラットフォームは確かに当時の情勢を安定さ  
せる重要なかなめであり、また台湾のニュースメ  
ディアが学ぶべきところである。

NHKの経費の一部は政府から出ており、ほか  
の部分は74%の視聴者で、視聴者に「受信料を支  
払う」習慣があるが、受信料を支払う家は減少し  
ている。NHKは直ちに市場の反応を受け止め、こ  
のように市場と政府の双方の監督を連動するこ  
とにより、日本の公共放送局を重要な情報源とし  
ている。この点は台湾の弱体化する公共放送局と  
大きく異なる。現在、台湾の公共放送局（公共電  
視台）は、多くの視聴者の心には、「教育的意義は  
あるが、たいくつだ」、「たまたまチャンネルに回  
した時のみ見る」地位にある。災害の発生又は重  
大事件の情報源に公共テレビ台は選ばない。公共電  
視台にはそれほど「公共」の感覚がない。

日本新聞協会は、日本の記者、新聞社の同業組  
合のようなものである。会員の仕事の質が、協会  
の観察対象である。例えば、第二次世界大戦が終  
結したばかりの時は、報道の質が粗い新聞社は、  
会員資格を取り消された。協会は紙メディアの水  
準をコントロールしようとしている。ただ、彼ら

も紙メディアの購読人口が減少しつつあることは否定しない。新興の電子新聞が、彼らの新たな会員のタイプである。日本のこのような記者クラブは、かなり排他的な組織だが、記者は比較的高い社会的地位を持つため、このような不平等な機関でも、大衆に議論されない。結局、大衆の言論とは、ニュース報道に基づく内容なのだ、彼らはニュースを司る人々なのだ。

東京大学のキャンパスの環境は整然と秩序立っていた。アーチ型の門、彫像など西洋建築の要素を伴っている。迎えてくれた一郎さんは、私達をつれてキャンパスの景勝スポットで写真を取ってくれた。最後に、情報学環に着き、簡単に昼食を取った後、学生間の交流を行った。出発前に先生が7つの討論テーマを用意して下さった。私達は自分が興味のあるテーマで、日本の学生と意見を交換した。私のグループのテーマは、科学普及ニュースのニュース倫理で、私のグループの政治大学ニュース所博士課程の盧安邦先輩、韓国籍の博士課程の金さん、大学部の一郎さんと、私達は日本語、韓国語、英語の3種類の言語で、意思疎通を図り、科学普及ニュースの報道方法及び3.11の地震による原子力発電所の災害ニュースについて討論した。

一郎さんは私達に次のように話した。当時の日本政府は原子力発電所は地震の影響を受けないと誓って言っていたが、1年後インターネットメディアが、政府は福島原子力発電所がすでに故障していたことを知っていたという、証拠を握った。それまで政府の言葉を裏付けていた科学ニュースは、笑い話であり、かつ日本のメディアの報道態度が過度に賛同するものであり、事実の風刺のようであった。金さんの考えは、科学的内容は報道に信頼性を与えるものだが、福島原発災害例について言えば、科学ニュースは政府又は特定の関係者の宣伝ツールになり下がっているというものだった。インターネットへの依存度が大きい世代としては、テレビのニュースは台湾と日本の学生



が好むメディアではない。私達はインターネットで情報を得ることに慣れている。自己が納得できる内容を信じる。また、情報の立場が衝突している状況によく直面する。筋が通っている論述ほど賛同されるが、メディアに裏切られると、失望も大きい。

日本新聞博物館には、各時期の日本の新聞、紙面広告が展示されていた。日本の歴史を記録し、各種印刷のツールを保存している。鉛活版印刷のように、紙メディアで長い間印刷方式であったものもある。鉛活字の鑄造、文選、植字、層別印刷などのステップを踏んで、一部の新聞がようやく完成する。林鴻亦先生は、兵役時の鉛活版印刷での経験を話して下さいました。それは一文字も間違えられない大変な作業で、間違えると、製版をやり直すので、発行の時間に間に合わなくなる。2階では、2012年の優れた新聞紙面撮影展が特別に展示されていた。一枚の写真に無数の本棚が写っていた。本棚には、地震被災地域で見つかった写真が置いてあった。これらの写真は家族や友人に開放し、持ち帰ってもらう。ただ、永遠に持ち帰られることのない写真もあるだろう。その写真に私はたまらなくつらい気持ちになった。

館内ではニュース体験活動も行っていた。組版ソフトを使って、記者の原稿作成の感覚を体験する。しかもすぐにできたものを手にできる。有意義な記念品だ。

## 長野の濃密な人情味

長野は日本で面積が4番目に大きな県で、昔は「信濃の国」と称した。一般の人は長野県を「信越」、「信州」と呼ぶ。SBC 信越放送は長野県のメディアで、本来ラジオ放送をしていて、その後テレビ放送を開始した。東京のTBCグループ傘下の企業である。彼らのニューススタジオ内には、2つのキャスターデスクがある。一つはゴールデンタイムのニュースに使用する大型のキャスターデスクで、4代のカメラが同時に撮影する。もう一つは小型のキャスターデスクで、短時間又は緊急ニュースに使用する。臨時の労働力の移動配置を避け、2台のカメラだけで、制作放送ができる。レジャー番組のスタジオには同時に2つのセットがあり、番組編成でカメラの画面を切り換え、広々としたスペース感を作り出している。面白いのは、スタジオ内に換気設備がないために、料理番組は、大量の油煙の出る料理を作れないことだ。しかし、熱々の画面を届けるために、ドライアイスで作った煙霧を使っていることだ。まったく不思議だ！

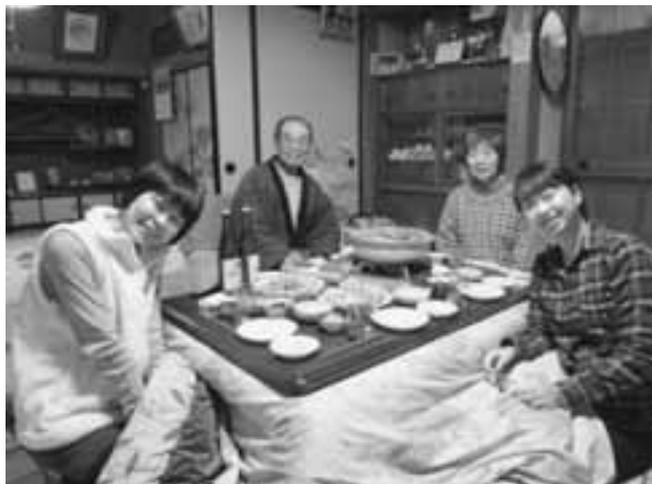
TBCグループの地方局として、グループ内のほかの放送局の番組を放送するほか、SBCは依然として11%の番組を自主制作しており、自主制作比率の高い地方局となっている。彼らはまた、SBCとTBCの資金の分配についても率直に語ってくれた。SBCの夜6時半からのニュースはすべて長野県の内容である。大きなニュース事件があれば、SBCはその他の地域のニュース資料の提供者となる。ニュースの内容はTBCに制約されない。ただニュースは必ず正確でなければならない。

信濃毎日新聞社は、長野県の大規模新聞社である。購読世帯は70万世帯近く、シェアは約60%である。彼らは共同通信社（台湾の中央社に類似）と情報を交換している。重要事件発生時の20分以内に、彼らは情報を受け取って、取材報道を行う。以前、通信技術が未発達だった時には、信濃毎日新聞社の屋上で、たくさんの伝書鳩を飼っていて、

適時に情報を伝達できるようにしていた。伝書鳩を飛ばすことが本当にあったとは思わなかった。信濃毎日新聞は、長野県を5つの地域に分け、ニュースを読者の周辺環境により根差したものとしていた。同時に、長野議会や国会の長野県代表を取材し、彼らの施政状況に強い関心を寄せることも、有権者の読者には大きな助けとなった。

地方新聞社であっても、信濃毎日新聞が使用する「バーコード組版」方式は、文章画像及び文字をまずデータベースに入れ、バーコードをスキヤニングすることで、組版をするというものだ。これで組版のスタッフの文字校正を省くことができる。このような便利さと技術を一つにした開発は、私達を驚かせて止まなかった。日本の各企業が「マスコット」を持っている。アニメ又は擬人化したキャラクターを利用し、視聴者の企業に対するイメージを創造している。信濃毎日新聞のマスコット「なーのちゃん」もその一つである。小学校で新聞を平仮名や漢字の教材に使うので、新聞社は子供達に小さい頃からこのキャラクターを好きになってもらい、大きくなってからも好きでいてほしい、新聞を読んでほしいと願っている。これは将来を見据えたブランドセールス手法だ。

長野の訪問行程には、文化の息遣いも添えられていた。私達は善光寺でおいしい精進料理を頂いた。菜食料理だったが、台湾の大量の豆類加工品の菜食料理に比べ、私達を非常に満足させた。次に、善光寺の和尚さまに率いられ、線香とろうそくが盛りだくさんのお寺を参観した。地下の戒壇をぐるりと歩き、神像の下にある「幸福の錠前」に触った。これは光を失うことにより、「視覚に頼って物事を理解してはいけない」という道理を体得するためだ。夕食の時間に長野開発公社の富岡さんが用意してくれたサプライズは、すべての人に感動させ、また忘れがたいものにした。1晩泊って翌日朝早く、飯綱高原に向かい、スキーに挑戦した。その日は陽光があまねく照らし、厚い積雪の上に、水が少しだけ溶



けだしていた。私は何度も転んだが、幸い雪の上では少しも痛くなかった。3度目でついに、うまくリフトから降りて、山の下まで滑り降りることができた。

長野の芋井地域には、敬愛すべきおじいさんとおばあさんたちが「芋井民泊協会」を組織し、長野を訪れる旅行客を受け入れていた。私達も彼らの家で一日だけの孫娘になった。私が宿泊した傳田家は伝統的な日本式の住宅で、ちびまるこちゃんが一番隠れるのが好きなこたつがあった。そして、全身を浸せる浴槽があった。目に入るものはすべてとても「日本」的な装飾だった。夕食で私達は一緒に傳田さんの奥さんを手伝い、野菜を洗ったり、スパゲティのソースを煮たりした。奥さんがなべを直接こたつの上に置いて温めるのを見た時は、また驚いてしまった。おかしくて奥さんといっしょにずっと笑っていた。テーブルで、おじいさんが親切にお酒を飲もうと私達を呼び、清酒とビールをコップになみなみと注いだ。あったかいこたつに座り、アルコールの作用が加わって、私達はかたづけが終わると眠くなり、早々と眠りに行った。

早朝には、テーブルいっぱいのおかずの朝食ができていた。おいしい日本のお米を食べるととても嬉しかった。それから、私達は小学校に行き、餅つきを体験した。手でたくさん草もちを包んだ。その後、音楽に合わせて、彼らの伝統舞踊を教わった。聞くところでは、芋井地区は農

業を主とするため、舞踊の動作が、農作業の時の体の振りのようだという事だ。これは神聖な、かつ親しみを失わない活動である。別れの歌を2曲歌っていると、そばですでにたまらなくなって泣いている人がいた。おじいさんとおばあさんは本当に私達に親切にしてくれた。また、非常に熱心に私達と彼らのすべてを分かち合ってくれた。傳田の奥さんが私達に成人式の和服を出して見せてくれたのを思い出すと、心の中で感謝と名残惜しい気持ちが湧き上がってきた。

芋井のおじいさんとおばあさんたちと別れ、私達は松代荘に行って、和服の着付けと茶道を体験した。和服を着ると、人間がまるごと端正になった。茶道の授業で、私達は座っても、跪いても、依然として姿勢を維持した。彼らが長い間守ってきた文化を汚すことをとても恐れた。第二次世界大戦時には、日本当局は長野に象山地下壕を掘り、捕虜と当地の国民を利用して、撤退拠点を築こうとした。しかし完成を前にして、戦争は終わった。当地の高校生が、郷土の授業を通じて、この戦争期の建物を保護し、戦争の悪を記録し、平和の象徴とした。入ってみると、怖い感じがした。地下の暗く冷たい感触は、戦争の残酷さのようで、世間の人々が二度と戦争を起こし、人民を迫害することがないように何度も忠告しているのだ。

台湾のメディア学科の学生に、このような機会を下さった日本交流協会に感謝します。また、鳴海さんの計らいと付き添いに、山本さんの通訳と協力に感謝します。林鴻亦先生には、日本を理解する団長として、私達にポイントを適時に指摘して頂き、ありがとうございます。荘幸如さんの旅行前と行程での心遣いに、お礼を申し上げます。富岡さんの長野でのすべての計らいに感謝します。日本のメディアを訪れ、日本人と差し向かいで交流する、こうした機会は本当に非常に得がたく貴重なものです。また日本を訪れ、旅行以外の方法でも、日本を詳しく知る機会を得られるよう願っています。

## 日本交流協会新聞訪日団体験報告

交通大学メディア・テクノロジー学科  
洪欣慈

大学最後の年の冬休みに、幸運にも、日本交流協会主催の今回のメディア訪日団に選ばれ、参加することができ、また、日本へ行ってメディア企業を実際に訪問し、現地の文化を体験することができた。この短い9日間の交流団で、各大学のメディア学科出身の多くの優秀な学生と知り合えただけでなく、コミュニケーションを通じて、自分に足りない、多くのことを学ぶことができた。そして協会の企画したメディア機関の訪問と交流により、日本のメディア業界と台湾の状況の違いを詳しく知ること、大きな衝撃を受け、反省した。

### 東京のメディア業

#### 日本テレビ

日本に着いて、最初に向かった企業は日本テレビだった。日本テレビは1953年に設立され、日本で最初に設立、開局した商業無線放送局である。関東地域を放送エリアとしている。日本テレビで参観及び交流する中で、まず衝撃を受けたのが、日本の商業放送局の数だった。台湾ではテレビをつけるのと、ともすれば数百局からチャンネルを選べるのに対し、日本のテレビ局は数がかなり少なく、競争がこれほど激しくない状況では、広告と視聴率の圧力は小さいと言える。また、台湾のように視聴率を尊び、メディア内容の混乱に影響を与えることもないだろう。

質疑応答で、ある学生が商業放送局には政治、経済などにおけるメディアの立場の問題はないのかと尋ねた。日本テレビはこう答えた。日本のメディアの身分と地位がここまで上がってきたと言っても、報道ではまだかなり保守的であるため、ニュースの制作では、メディアは中立的立場を守

る必要がある。各方面の意見と素材を視聴者に届けるだけで、判断や立場は、視聴者自身の評価判断に委ねなければならない。台湾のような政治的立場が鮮明なメディアのイメージはあまりない。また、ニュース部門を参観した時も、このような厳しい雰囲気を感じた。キャスターのアナウンスを例にとると、日本のキャスターは報道の際に、いつもオフィス内の実景をそのまま背景としており、繁雑さや装飾を抑えている。ニュースの題材の選択では、特別な時間帯のニュース番組を除き、普通のニュースの時間帯に放送するニュースの多くは、政治、経済、社会を主としており、娯楽や芸能などの内容はあまり見られない。台湾のように24時間放送し続けられないため、ニュース報道の質の低下を避けることができるのだ。

最近、台湾でもメディア内での同業組合設立の話題が、かなり注目されているが、日本ではすでにある程度まで発展している。日本テレビの場合、テレビ局に労働組合組織があり、メディア従事者の権益を保障している。労働組合の組員はすべて社員で構成されている。各社員が入社すると、そのまま入会することになる。組織は労働者側と資本家側を代表して、意思疎通と協調を図ることができる。労働者側の積極性と自主意識が高く、この点は台湾の既存のメディア業界の状況とは大きく異なる。台湾のメディア業界はようやく労働組合組織の重要性を意識しはじめたところだ。すでに発展し成熟している日本のメディア業界は、台湾のすべてのメディア従事者の手本及び参考となるだろう。

#### NHK 国際部

NHKは日本で現在就業者数及び予算規模が最大のメディア組織であり、公共メディアとして、教育テレビ、総合テレビ及びラジオ部門がある。NHKの訪問で、印象が強かったのは、彼らが科学番組の制作で努力をしていることと、災害報道での厳しさだった。2年前、日本は3.11大地震



を経験し、大きな被害を受けた。災害発生当時、全世界のメディアが待っていたのが、NHK が伝える情報だった。最も私を驚かせたのは、NHK 内部で普段から、報道訓練、ヘリコプター及びロボットの被災地調査などの技術による、災害避難訓練システムを構築していることだった。また、非常事態において、各メディアへ発令し、共同防災及び避難情報を放送する、災害警報システムも構築している。様々な措置がかなり整っていると見える。

一方で、公共放送局である NHK は、運営費用を主に全日本国民が収める受信料の収入で賄っている。商業的圧力がないため、NHK 内の番組は、視聴率で寿命を左右されることもない。教育的意義があり、国民にとって有益でありさえすれば、NHK は制作を続ける。NHK では、日本国民の多くが見る人が料金を支払うという概念を持っているのだと感じた。全国の国民のうち、74% の人が受信料を納め、自分の国の公共放送局を養っている。このような概念があるために、NHK の運営は、なんら商業及び政府の圧力を受けることなく、彼らが視聴者にとって役に立ち、かつ重要だと考えるニュースと番組の制作に専念できる。

## 長野県のメディア業

### SBC 信越放送

SBC は長野県を放送エリアとするテレビ局兼

ラジオ局で、かわいいマスコットと温かい仕事環境がある。地方局とキー局には、はっきりとした違う雰囲気があり、それほど張りつめた感じを与えない。日本は領土が広いので、地方局とキー局では、番組制作にも、ニュースの放送内容にも、大きな違いがある。

SBC を例に挙げると、毎晩 6 時のテレビニュースの大半は長野地方のニュースコンテンツを主としている。一定の割合で地方の番組もあり、はっきりと地方のニーズに基づき、異なるコンテンツを割り振っている。地方のコンテンツのほか、TBS 傘下の SBC は、全国の情報ネットワークを利用して、各地の重要事件を入手し、全国的なバラエティー又はドラマ番組を一部放送している。日本の地方メディアの経営は、台湾とは大きく異なっている。台湾の国土が狭いために、台湾には地方メディアと全国メディアの明確な区別がないのかもしれない。しかし、SBC のようなタイプの地方メディアは、コンテンツ経営及び地方の国民との相互コミュニケーションにより、地域住民の地方メディアに対する感情と依存を得ることができるという、台湾とはかなり違ったメディアの特質がある。

### 信濃毎日新聞

信濃毎日新聞は、今回の参観訪問行程で、唯一訪問した新聞業界メディアだった。1873 年より

発行されている信濃毎日新聞は、100年以上の歴史ある老舗の新聞社である。毎日朝刊と夕刊を発行しており、長野県向けに発行されている地方新聞である。驚いたのは、日本各地の地方新聞を合わせると100社近くあるということだ。これは小さい頃から台湾のような小さな島嶼で育った私には、すぐには想像しにくいことだ。

信濃毎日新聞を訪問して、最も印象深かったのが、「号外」という特別号の存在とそして原稿をバーコード化する先進技術だった。重大事件が発生した時に（例えばオリンピックのメダル獲得、大災害の発生など）、日本の新聞はどこも特別に「号外」を印刷し、駅やコンビニに発送する。読者はこの新聞で、いち早く最新の情報を入手できる。私達が参観した新聞社の人の説明では、通常、号外は事件発生後30～40分以内に、印刷を終わらせる必要がある。非常に適時性を重んじている。人を感動させるものが、紙メディアからネットメディアに代わりつつある時に、紙メディアは変わらずその力を発揮している。

このほか、日本の新聞業界と台湾の新聞が大きく異なるのは、日本の新聞がニュースを掲載する時に、報道記者の氏名を記載しないことだ。尋ねてみて分かったのだが、以前から日本のメディアは、ニュースの責任は新聞社に帰属させるべきだという概念を持ち続けてきた。また、多くのニュースが時には、複数の団体で書き上げられ、責任を帰属させることが難しい。このため、通常は名前を記載しない。こうすれば記者の圧力を軽減し、紛争を減らすこともできる。一方、台湾の最近の様々なメディアの問題の一部は、編集室が規約を結ばないことに起因し、名前を記載した記者が、自身が書いたのではない文章のために批判されることがよくある。日本のこのようなやり方は、まったく問題がないとは言えないが、台湾のメディア環境にどんなやり方が最も適しているかを台湾に考えさせる参考になると思う。

最後に別れる前に、信濃毎日新聞は一人ひとりに今回の参観訪問に関する新聞をくれた。それには私達が訪問に来た時に撮影した団体写真が印刷されていた！その時、涙が出そうになった。長野の人の親切さと心遣いが、強く印象に残った。

## 新聞組織及び交流

### 日本新聞協会

メディア業界が共同で組織する日本新聞協会は、機能が非常に特殊かつ重要な新聞組織だ。主な業務は、新聞規範の制定、各種講座と刊行物の運営、及びメディアの監督管理など重大な責任を負っている。日本新聞協会を訪問した時、私達のために発行部数の減少、広告数の減少といった、多くの今の日本の新聞業界が直面している問題をまとめてくれた。また、この組織の運営方式について説明してくれた。新聞協会内部には審査室があり、紙面を見るといったメカニズムを通じて、協会内のメディア会員が新聞規範を遵守しているか確認している。違反があれば、会員資格を剥奪される。

訪問の際に、新聞協会のような機関は、どのようにしてはっきりとした機能を効果的に発揮するのかと、非常に興味を持った。新聞協会のこの質問に対する答えは抽象的だったが、提供された資料とレポートから、新聞協会が、新聞規範の制定及び標準化において、実際的な行動を起こすことが可能で、メディアの質を守る一つの窓口であることが分かった。しかし、こうした協会を長期間運営するには、組織の健全さのほか、全国民を頼りにして、一緒にメディアの素養を確立する必要があるとともに、ニュースメディアが自制できなければならない。そして日本はこの点の成長が久しく、また相対的に成熟している。

### 東京大学訪問

出国前に、東京大学で討論と交流をするというので、かなり緊張していた。言葉が通じないこと



が懸念される一方で、自分が学識不足で、交流でよい効果が得られないのではないかと心配だった。その結果、行ってみて分かったが、すべて自分の取り越し苦労だった。東大の学生との討論は非常に楽しく、言葉が障害となる時もあったものの、身振り手振りと言意の推測で、討論は非常によい効果が得られた。討論のテーマについて、今回東大の学生と交流したことで、最も貴重だったのは、若者と視聴者が実際に考えていることから、両国のニュースメディア産業のあり方の違いを比較できたことだ。たった1時間の討論だったが、大きな収穫があった。また、非常に面白い日本の学生たちに出会えたのも、とても忘れがたい経験だ。

### 新聞博物館

横浜にある新聞博物館は、一般大衆に日本のメディア発展史を教えることのできる重要な施設である。新聞博物館には日本の昔から今に至るまでのメディアの興りと衰退の様々な過程が展示され、多くの歴史文化財も保存されている。昔の銅版印刷機や、浮世絵スタイルの手描きのメディア刊行物が見られるだけでなく、たくさんの重要な歴史的ニュースの写真もあり、一枚一枚がどれも今日の日本の姿を形作る上で重要な役割を果たしている。

新聞博物館を去る前に、博物館が私達に自分の新聞を作らせた! スタッフが現場で写真を撮り、私

達は自分で文章を書いた。わずか数分間で、二つとない自分の紙面ができ、非常に貴重な記念となった。新聞博物館のような存在は実はとても重要だと思う。展示を通じて、より多くの大衆にメディアの発展と歴史に触れ、理解してもらえるからだ。また、大衆に自分たちの歴史を振り返ってもらうこともできる。これは重要なメディア教育の一環でもある。

### 日本の文化体験

充実した訪問行程のほかに、交流協会は、日本現地の文化と日常生活を多く体験する機会も用意してくれていた。ほんのわずかでも、今回の日本訪問の中では非常に大切な思い出となった。

### 温かいホームステイ

今回日本に行って、私は初めてホームステイを体験した。私と聖庭と佳提の3人の学生をもてなして下さったのは、80近い一子さんと娘さんの早苗さんだった。私と聖庭は日本語ができないため、ホストファミリーとのコミュニケーションはすっかり佳提が頼りだった。言葉は通じなくても、ここでもやはり多くの親切と温かさを感じた。今回日本に行って、一番忘れがたい出来事になった。

わずか1日の滞在だったが、一子さんと早苗さんは、できうる限り、家の中のすべての特産物を取り出して、私達に食べさせてくれた。夕食でも朝食でも、テーブルいっぱい料理が並べられ、きっと私達がお腹を空かせていると思ったのだろう。また、たくさん話題を見つけて、おしゃべりをして下さった。おしゃべりの話題から、多くの日本の伝統文化と民話を聞いた。夕食後、早苗さんは私達にラッカセイを持たせ、日本の伝統的な習わしである鬼払いをさせた。ちびまるこちゃんのアニメに描かれているように、ラッカセイを巻きながら、窓の外に向かって、鬼は外と叫び、今度は家の中に向かって、福は内と叫んだ。私達には得難い体験だった。

最後に分かれる時、名残惜しさがピークに達し、



窓の外のだんだん小さくなる人影を見ていると、鼻がつんとしてきた。たった1日で、この家族にこんなに多くの感情を抱くようになるとは思ってもよらなかった。時間はわずかでも、2人が示してくれた親切、私達への至れり尽くせりの世話、少しのことにもすべて感じ入ってしまった。どれだけ経っても、2人の愛すべき活き活きした姿は忘れない。すべてしっかりと記憶の中に留まり、消えることはないだろう

#### 茶道、和服文化の新体験

最も日本文化を代表するものとは聞かれて、きっと誰もがすぐに思いつくのが茶道と和服だろう。そして今回の交流団の機会を通じて、幸運にもこの両方を体験できた！以前、日本映画を見た時に、美しい和服を見ながらいつも憧れていたが、実際に着るとなると、和服を着ることは、本来非常に手間のかかることだと分かった。2、3人のベテランのおばあさんに手伝ってもらわなければ、簡易版の和服さえ着られないのだ。着るのに時間がかかったが、日本スタイルの衣装を着て写真を撮ったことは、新鮮な体験である。日本の文化に少し近付けたように感じた。

和服を体験し終わると、次は茶道の時間である。日本では、本物の茶道は決まりがかなり厳しく、姿勢から、礼節、道具、飲む順序まで、様々な細

かい点にすべて明確な規範があり、非常に注意が必要である。本物の茶道では普通は飲むと苦いので、お茶を飲む前に、主人がまず客を甘い和菓子でもてなす。この時客は一口ずつ剥がすように食べることにしか許されない。絶対に、そのまま囓んではいけない！そしてお茶が出されたら、礼をする、茶碗を捧げ持つなど、ほかにもたくさんの決まりを守らねばならない。一杯のお茶を飲む過程で、一瞬たりともいいかげんにしてはならない！繁雑だが、茶道からも日本人の謹厳さと少しもおろそかにしない民族の性格が伺えます。伝統文化に隠された道理は尽きない。

この9日間の日本訪問は、日本のメディア業に対してより深い認識を得られたほか、多くの日本の伝統文化を体験させてくれた。また、生まれて初めてスキーをする機会もあった！今回の機会を下さった日本交流協会にとっても感謝している。また、荘さん、鳴海さん及び通訳の山本さん、この数日間に渡り、細心のケアと手助けをありがとうございました。今回の日本訪問での大きな収穫は、充実した知識以上に、人と過ごすことで蓄積された気持ちだった。この数日で、日本を知っただけでなく、多くの楽しい友人や先輩達と知り合った。このわずかなことがすべて将来メディア業に携わる上で糧となるだろう。また、記憶の中の永遠に色あせない1ページとなるだろう。